

# 人魚の祠

泉鏡太郎

青空文庫



「いまの、あの婦人ふじんが抱だいて居ゐた嬰あかんぼ児こですが、鯉こひか、鼈すつぽんででも有ありさうでならないんですがね。」

「……………」

私わたしは、黙だまつて工こう學がく士しの其その顔かほを視みた。

「まさかとは思おもひますが。」

赤あかさか坂さかの見み附つけに近ちかい、唯とある珈こ琲お店ひの端はし近ぢかな卓て子えで、工こ學がく士しは麥まい酒しゆの硝こ子っ杯ぷを控ひかへて云いつた。

私わたしは卷まき苘たばこを點つけながら、

「あゝ、結構。わたしは、それが石地藏で、今のが姑護鳥でも構ひません。けれども、それぢや、貴方が世間へ濟まないでせう。」

六月の末であつた。府下澁谷邊に或茶話會があつて、斯の工學士が其の席に臨むのに、私は誘はれて一日出向いた。

談話の聽人は皆婦人で、綺麗な人が大分見えた、と云ふ質のであるから、羊羹、苺、念入に紫袱紗で薄茶の饗應まであつたが——辛抱をなさい——酒と云ふものは全然ない。が、豫ての覺悟である。それがために意地汚く、歸途に怗うした場所へ立寄つた次第ではない。

本來なら其の席で、工學士が話した或種の講述を、こゝに筆記でもした方が、讀まるゝ方々の利益なのであらう

けれども、それは殊ことさら更に御海容ごかいようを願ねがふとして置く。

實じつは往路いきにも同伴つれだ立つた。

指さす方かたへ、煉瓦れんぐわ塀べい板いた塀べい續つづきの細ほそい路みちを通とほる、とやがて其その  
會くわい場ぢやうに當あたる家いえの生垣いけがきで、其處そこで三みつの外そと圍がこひが三さん方ぼうへ  
岐わかれて三みつ辻つじに成なる……曲まがり角かどの窪地くぼちで、日陰ひかげの泥濘ぬかるみの處ところが  
——空そらは曇くもつて居ゐた——殘のこりの雪ゆきかと思おもふ、散敷ちりしいた花はなで眞白まつしろ  
であつた。

下したへ行ゆくと學士がくしの背廣せびろが明あかるいくらゐる、今いまを盛さかりそらそらに咲さく。枝えだも  
梢こずえも撓たがひに滿みちて、仰向あをむいて見上みあげると屋根やねよりは丈伸たけのびた樹きが、  
對つみ並ならんで一ふた株かぶあつた。李すももの時節じせつでなし、卯木うつきに非あらず。そして、  
木犀もくせいのやうな甘あまい匂ほひが、燻いぶしたやうに薰かをる。橢圓形だゑんけいの葉はは、

羽状うじやう複葉ふくえふと云いふのが眞まつ蒼さに上うへから可愛かはいい花はなをはらくと包つんで、鷺さぎが緑みどりなす蓑みのを被かついで、イみつゝ、颯さつと開ひらいて、雙方さうほうから翼つばさを交かはした、比翼ひよく連理れんりの風情ふぜいがある。

わたしもと  
私は固かたよりである。……學士がくしにも、此この香木かうぼくの名なが分わからなかつた。

當日たうじつ、席せきでも聞き合せたが、居合ゐあはせた婦人ふじん連れんが亦また誰れも知らぬ。其その癖くせ、佳い薰ゝかをりをりのする花はなだと云いつて、小ちひさな枝えだながら硝コツップッに插さして居ゐたのがあつた。九州きゅうしゅうの猿さるが狙ねらふやうな棲すまの媚なまめかしい姿すがたをして、下した枝えだまでも届とどくまい。小鳥こどりの啄つんで落おとしたのとほを通とほりがかりに拾ひろつて來きたものであらう。

「お乳ちいのやうですわ。」

ひとり 一人の處女が然う云つた。

なるほど 成程、近々、と見ると、白い小さな花の、薄りと色着いた

のが一ツ一ツ、美しい乳首のやうな形に見えた。

却説、日が暮れて、其の歸途である。

わたし 私たちは七丁目の終點から乗つて赤坂の方へ歸つて來た

……あの間の電車は然して込合ふ程では無いのに、空怪しく雲

脚が低く下つて、今にも一降來さうだつたので、人通りが

慌しく、一町場二町場、近處へ用たしの分も便つたらしい、

停留場毎に乗人の數が多かつた。

で、何時何處から乗組んだか、つい、それは知らなかつたが、

丁ど私たちの並んで掛けた向う側——墓地とは反對——の處に、

二十三四の色の白い婦人が居る……

先づ、色の白い婦と云はう、が、雪なす白さ、冷さではない。

薄櫻の影がさす、臙に香ふ装である。……こんなものこそ、膚

と云ふより、不躰ながら肉と言はう。其胸は、合歡の花が雫し

さうにほんのりと露である。

藍地に紺の立絞の浴衣を唯一重、絲ばかりの紅も見せず素

膚に着た。襟をなぞへに膨りと乳を劃つて、衣が青い。青いのが

葉に見えて、先刻の白い花が倂立つ……撫肩をたゆげに落

して、すらりと長く膝の上へ、和々と重量を持たして、二の腕

を撓やかに抱いたのが、其が嬰兒で、仰向けに寝た顔へ、白い

帽子を掛けてある。寝顔に電燈を厭つたものであらう。嬰兒



の顔は見えなかつた、だけ其だけ、懸念と云へば懸念なので、工  
 學士が——鯉か鱈か、と云つたのは此であるが……  
 此の媚めいた胸のぬしは、顔立ちも際立つて美しかつた。鼻  
 筋の象牙彫のやうにつんとしたのが難を言へば強過ぎる……  
 かはりには目を恍惚と、何か物思ふ體に仰向いた、細面が  
 ひきしま引緊つて、口許とともに人品を崩さないで且つ威がある：  
 ……其の顔だちが帯よりも、きりりと細腰を緊めて居た。面で緊  
 めた姿である。皓齒の一つも莞爾と綻びたら、はらりと解けて、  
 帯も浴衣も其のまゝ消えて、膚の白い色が颯と簇つて咲かう。霞  
 は花を包むと云ふが、此の婦は花が霞を包むのである。膚が衣を  
 消すばかり、其の浴衣の青いものにも、胸襟のほのめく色はうつ

ろはぬ、然も湯上りかと思ふ温さを全身に漲らして、髪かみの艶つやさへ滴したるばかり濡ぬれ々々として、其それがそよいで、硝子窓がらすまどの風かぜに額ひたひに絡まつはる、汗あせばんでさへ居ゐたらしい。

ふと明あいた窓まどへ横よこ向きむに成なつて、ほつれ毛げを白しろ々々とした指ゆびで搔かくと、あの花はなの香かが強つよく薫かつた、と思おもふと緑みどりの黒くろ髪かみに、同おなじ白しろい花はなの小枝こえだを活いきたる萼うてな、湧わ立つ蕊しべを揺ゆるがして、鬢びんづらに插さして居ゐたのである。

唯と、見みいた時とき、工學士こうがくしの手てが、確しかと私わたしの手てを握にぎつた。

「下おりませう。是非ぜひ、談話はなしがあります。」

立たつて見送みおくれば、其その婦をんなを乗のせた電でん車しゃは、見附みつの谷たにの窪くぼんだ廣ひろ場ばへ、すらくと降おりて、一いち度ど暗くらく成なつて停とまつたが、忽たちち風かぜ

に乗つたやうに地盤ぢばんを空そらぎまに颯さつと坂さかへ上すつて、青あをい火花ひばながちらちらと、櫻さくらの街樹なみきに搦からんだなり、暗夜くらがりの梢こずゑに消きえた。

小雨こさめがしとくと町まちへかゝつた。

其處そこで珈琲店コオヒイテンへ連立つれだつて入はつたのである。

こゝに、一寸斷ちよつとつておくのは、工學士こうがくしは嘗かつて苦學生くがくせいで、其當時そのたうじは、近縣きんけんに賣藥ばいやくの行商ぎやうしやうをした事ことである。

## 二

「利根川とねがはの流ながれが汎濫はんらんして、田たに、畠はたけに、村里むらぎとに、其その水みづが引ひ残きのこつて、月つきを經へ、年としを過すぎても涸かれないで、其そのまゝ溜たまり水みづ

になつたのがあります。……

小さなのは、河骨の點々黄色に咲いた花の中を、小兒が徒

に猫を乗せて盥を漕いで居る。大きなのは汀の蘆を積んだ船が、

棹さして波を分けるのがある。千葉、埼玉、あの大河の流域

を辿る旅人は、時々、否、毎日一ツ二ツは度々此の

水に出會します。此を利根の忘れ沼、忘れ水と呼んで居る。

中には又、あの流を邸内へ引いて、用水ぐるみ庭の池にし

て、筑波の影を矜りとする、豪農、大百姓などがあるの

です。

唯今お話をする、……私が出會ひましたのは、何うも庭に造

つた大池で有つたらしい。尤も、居周圍に柱の跡らしい礎も見

當りません。が、其とても埋れたのかも知れませんが、一面に草  
 が茂つて、曠野と云つた場所、何故に一度は人家の庭だつたか、  
 と思はれたと云ふのに、其の沼の眞中に拵へたやうな中島の  
 洲が一つ有つたからです。

で、此の沼は、話を聞いて、お考へに成るほど大なものではな  
 いのです。然うかと云つて、向う岸とさし向つて聲が届くほどは  
 小さい。それぢや餘程廣いのか、と云ふのに、又然うでもな  
 い、ものの十四五分も歩行いたら、容易く一週り出來さうなん  
 です。但し十四五分で一週と云つて、すぐに思ふほど、狭いので  
 もないのです。

と、恚う言ひます内にも、其の沼が伸びたり縮んだり、すばま

つたり、擴ひろがつたり、動うごいて居ゐるやうでせう。——居ゐますか、結け構つこうです——其そのつもりでお聞きき下ください。

一體いつたい、水みづと云いふものは、一ひとしづく 雫なの中なかにも河童かつばが一個ひとつ居ゐて住す

むと云いふ國くにが有ありますくらゐ、氣き心ごころの知しれないものです。分わけ

て底そこぞ澄ずんで少すこし白味しろみを帶おびて、とろ／＼と然しかも岸きしとすれ／＼に

満まん々くと湛たへた古沼ふるぬまですもの。丁ちやうど、其その日ひの空模そらもやう様くも、雲くもと

同おなじ一どんよに淀どんよりとして、雲くもの動うごく方ほうへ、一いつしよ所しょに動うごいて、時とき々／＼、

てら／＼と天てんに薄日うすびが映さすと、其その光ひかりを受うけて、晃きら々／＼と光ひかるの

が、沼ぬまの面おもてまなこに眼まなこがあつて、薄目うすめに白しろく人ひとを窺うかがふやうでした。

此これでは、其その沼ぬまが、何なんだか不氣味ぶきみなやうですが、何なに、一ちよつと寸との

間まの事ことで、——四時じさが下がり、五時じまへ前へと云いふ時じこく刻く——暑あつい日ひで、大たいそ

層うつか疲みぎれて、汀なにぐつたりと成なつて一ひと息吐いきいて居ある中うちには、雲くもが、なだらかに流ながれて、薄うすいけれども平たひらに日ひを包つむと、沼ぬまの水みづは静しづかに成なつて、そして、少すこし薄うす暗くらい影かげが渡わたりました。

かぜ

風かぜはそよりともない。が、濡ぬれない袖そでも何なんとなく冷つめたいのです。

風情ふぜいは一段いちだんで、汀みぎには、所々ところ／＼、丈たけの低ひくい燕子花かきつばたの、紫むらさき

の花はなに交まじつて、あち此方こちに又また一輪りんづ、言交いひかはしたやうに、白しろい花はなが交まじつて咲さく……

あの中島なかじまは、簇むらつた卵うの花はなで雪ゆきを被かいで居あるのです。岸きしに、葉はなと花はなの影かげの映うつる處ところは、松葉まつばが流ながれるやうに、ちらくくと水みづが揺ゆれます。小魚こうをが泳およぐのでせう。

差渡さしわたし、池いけの最もつとも廣ひろい、向むかうの汀みぎに、こんもりと一本ほんの柳やなぎが

茂しげつて、其その緑みどりの色いろを際きは立てて、背後うしろに一ひとむら叢もりの森もりがある、中なかへ  
 横よこ雲ぐもを白しろくたなびかせて、もう一ひとむら叢もり、一いち段だん高たかく森もりが見みえる。  
 うしろは、遠とほざと里あはの淡もやい靄ひを曳ひいた、なだらかな山やまなんです。――  
 柳やなぎの奥おくに、葉はを掛かけて、小ちひさな葭よしず篋はり張ちやみせの茶ちや店みせが見みえて、横よこ  
 が街かい道だう、すまぐに水みづ田たで、水みづ田たのへりの流ながれにも、はららく燕かきつば子ば  
 花たが咲さいて居ゐます。此この方ほうは、薄うす碧あをい、眉まゆげ毛げのやうな遠とほ山やま  
 でした。

唯と、沼ぬまが呼いき吸きを吐つくやうに、柳やなぎの根ねから森もりの裾すそ、紫むらさきの花はなの上うへか  
 けて、霞かすみの如ごとき夕ゆふ靄もやがままはりへ一いち面めんに白しろく渡わたつて來くると、同おな  
 じ雲くもが空そらから捲まき下おろして、汀みぎはに濃こく、梢こずゑに淡あはく、中なかほどの枝えだを透す  
 かけて靡なびきました。



わたしゐる私の居た、草にも、しつとりと其の霽が這ふやうでしたが、袖には掛らず、肩にも巻かず、目なんぞは水晶を透して見るやうに透明で。詰り、上下が白く曇つて、五六尺水の上が、却つて透通る程なので……

あゝ、あの柳に、美しい虹が渡る、と見ると、薄霽に、中が分れて、三つに切れて、友染に、鹿の子絞の菖蒲を被けた、派手に涼しい装の婦が三人。

白い手が、ちら〜と動いた、と思ふと、鉛を曳いた絲が三條、三三處へ棹が下りた。

(あゝ、鯉が居る……)

一尺、金鱗を重く輝かして、水の上へ翩然と飛ぶ。」

## 三

「それよりも、見事なのは、釣竿の上下に、纏るゝ袂、翻る袖で、翡翠が六つ、十二の翼を翻すやうなんです。

唯、其の白い手も見える、莞爾笑ふ面影さへ、俯向くのも、仰ぐのも、手に手を重ねるのも其の微笑む時、一人の肩をたたくのも……蒼がひらく開くやうに見えながら、厚い硝子窓を隔てたやうに、まるつ切、聲が……否、四邊は寂然して、ものの音も聞えない。

向つて左の端に居た、中でも小柄なのが下して居る、棹が満

月の如くに撓つた、と思ふと、上へ絞つた絲が眞直に伸びて、  
 するりと水の空へ掛つた鯉が——」

——理學士は言掛けて、私の顔を視て、而して四邊を見た。恠  
 うした店の端近は、奥より、二階より、却つて椅子は閑であつ  
 た——

「鯉は、其は鯉でせう。が、玉のやうな眞白な、あの森を背  
 景にして、宙に浮いたのが、すつと合せた白脛を流す……凡  
 そ人形ぐらゐるな白身の女子の姿です。釣られたのぢやあり  
 ません。釣針をね、恠う、兩手で抱いた形。  
 御覽なさい。釣濟ました當の美人が、釣棹を突離して、柳  
 の根へ靄を枕に横倒しに成つたが疾いか、起るが否や、三人と

もに手鞠てまりのやうに衝つと遁にげた。が、遁にげるのが、其その靄もやを踏ふむの  
 です。鈍どんな、はずみの無い、崩くづれる綿わたを踏ふ越こし踏ふ越こしするやうに、  
 褌つまもつが纏もつれる、裳もすそが亂みだれる……其それが、やゝ少しばらく時あひだの間見あひだえました。  
 其その後あとから、茶店ちやみせの婆ばあさんが手てを泳およがせて、此これも走はしる……  
 一いつ體たいあへんの邊へんには、自じ動どう車しやか何なにかで、美び人じんが一日いちにちがけと云いふ  
 遊ゆ山さん宿やど、乃ない至し、温をん泉せんのやうなものでも有あるのか、何どうか、其そ  
 の後ごまだ尋たづねて見みません。其それが有あればですが、それにした處ところで、  
 近きん所じよの遊ゆ山さん宿やどへ來きて居ゐたのが、此この沼ぬまへ來きて釣つりをしたのか、  
 それとも、何なんの國くに、何なんの里さと、何なんの池いけで釣つつたのが、一いつ種しゆの蜃しんき  
 氣ろう樓ろうの如ごとき作用さようで此こ處うへ映うつつたのかも分わかりません。餘あまり靜しづか、  
 もの音おとのしやうない様やう子が、夢ゆめと云いふよりか其その海かい市いしに似にて居ゐました。

沼ぬまの色いろは、やゝ蒼味あをみを帶おびた。

けれども、其その茶店ちやみせの婆ばあさんは正しやうのものです。現げんに、私わたしが通

り掛がりに沼ぬまの汀みぎはの祠こうらをさして、（あれは何様なにさまの社やしろでせう。）と

尋たづねた時に、（賽さいの神様かみさまだ。）と云いつて教をしへたものです。今いま其

の祠ほこらは沼ぬまに向むかつて草くさに憩いこつた背後うしろに、なぞへに道みち芝しばの小高こだかく成

つた小ちひさな森もりの前まへにある。鳥居とりゐが一基いつき、其その傍そばに大おほきな棕櫚しゆろの樹きが、

五株かぶまで、一列れつに並ならんで、蓬おどろく々くとした形かたちで居ゐる。……さあ、

此これも邸やしきあと思おもはれる一ひとつ條じょうで、其その小高こだかいのは、大おほきな築つき山やまだ

つたかも知しれません。

處ところで、一せん錢せんたりとも茶代ちやだいを置おいてなんぞ、憩やすむ餘裕よゆうの無なかつ

た私わたしですが、……然さうやつて賣藥ばいやくの行商ぎやうしやうに歩行あるきます時分じぶん

は、世よに無ない兩りやう親しんへせめてもの供養くやうのため、と思おもつて、殊しゆし

勝やうらしく聞きこえて如何いかゞですけれども、道だうちう中ちゆう、宮みや、社やしろ、祠ほこらのある

處ところへは、屹きつと持もち合あはせた薬くすりの中なかの、何種なにしゆのか、一ひとつ包つづゝを

備そなへました。——詣まうづる人ひとがあつて神佛しんぶつから授さづかつたものと思おも

へば、屹きつと病氣びやうきが治なほりませう。私わたしも幸福かうふくなんです。

丁度ちやうど私の居ゐた汀みぎはに、朽木くちきのやうに成なつて、沼ぬまに沈しづんで、裂目さけめ

に燕子花かきつばたの影かげが映さし、破やぶれた底そこを中空なかぞらの雲くもの往來ゆききする小舟こふねの

形かたちが見みえました。

其それを見み棄すてて、御堂おだうに向むかつて起たちました。

談話はなしの要領えうりやうをお急いそぎでせう。

早はやく申まをしませう。……其その狐格きつねがうし子しを開あけますとね、何どうです

……

(まあ、此は珍しい。)

几帳とも、垂幕とも言ひたいのに、然うではない、萌黄と  
 青と段染に成つた綸子か何ぞ、唐繪の浮模様を織込んだのが  
 カアテン窓帷と云つた工合に、格天井から床へ引いて蔽うてある。  
 此に蔽はれて、其の中は見えません。

此が、もつと奥へ詰めて張つてあれば、絹一重の裡は、すぐ  
 に、御厨子、神棚と云ふのでせうから、誓つて、私は、覗くの  
 ではなかつたのです。が、堂の内の、寧ろ格子へ寄つた方に掛つ  
 て居ました。

何心なく、端を、キリくと、手許へ、絞ると、蜘蛛の巣

のかはりに幻まぼろしの綾あやを織おつて、脈みやく々くとして、顔かほを撫なでたのは、  
 薔薇ばらか堇すみれかと思おもふ、いや、それよりも、唯ただ今いま思おもへば、先刻さつきの花はな  
 の匂におひです、何なんとも言いへない、甘あまい、媚なまめいた薫かをりが、芬ぶんと薫かをつた。「  
 ——學士がくしは手巾ハンケチで、口くちを蔽おほうて、一寸ちよつと額めだひを壓おさへた——  
 「——其處そこが閨ねやで、洋式やうしきの寢臺ねだいがあります。二人寢ふたりねの寛ゆつたりとし  
 た立派りつぱなもので、一面いちめんに、光ひかりを持つた、滑なめらかに艶つや々くした、  
 絢ぬめか、羽はぶ二重たへか、と思おもふ淡あはい朱鷺ときいろ色いろなのを敷詰しきつめた、聊いさか古ふるびて  
 は見みえました。が、それは空そらが曇くもつて居ゐた所せ爲ゐでせう。同おなじ色いろ  
 薄搔うすかいまき卷まきを掛かけたのが、すんなりとした寢姿ねすがたの、少すこし肉附にくづきを  
 肥よくして見みせるくらゐ。膚はだを蔽おほうたとも見みえないで、美うつくしい女をんなの顔かほ  
 がはらはらと黒髪くろかみを、矢張やつぱり、同おなじ絹きぬの枕まくらにひつたりと着つけて、



こちらすこに少しあをむ仰向けなに成つて寝て居あます。のすが、其それが、黒くろめがちらさうひとみ  
目勝まな雙さうの瞳ひとをはつちりと開あけて居ある……此この目めに、此處こゝで殺ころされるのだらう、と餘あまりの事ことに然さう思おもひましたから、此方こつちも熟じつと  
凝視みつめしました。

少しすこ高過たかすぎるくらゐに鼻筋はなすぢがツンとして、彫刻てうこくか、練ねりもの  
か、眉まゆ、口許くちもと、はつきりした輪郭りんくわくと云いひ、第一だいいち櫻さくら色いろ  
の、あの、色艶いろつやが、——其それが——今いまの、あの電車でんしやの婦人ふじんに瓜う  
りふた  
二つと言いつても可いい。

時ときに、毛一筋けひとすぢでも動うごいたら、其その、枕まくら、蒲團ふとん、搔卷かいまきの朱鷺とき  
色いろにも紛まがふ蒼つぼみとも云いつた顔かほの女をんなは、芳香ほうかうを放はなつて、乳房ちぶさから蕊しべ  
を湧わかせて、爛漫らんまんとして咲さくだらうと思おもはれた。」

## 四

「わたしめくら  
私の目か眩んだんでせうか、婦は瞬をしません。五分か一時  
と、此方が呼吸をも詰めて見ます間——で、餘り調つた顔容と  
いひ、果して此は白像彩塑で、何う云ふ事か、仔細あつて、此  
の廟の本尊なのであらう、と思つたのです。  
床の下……板縁の裏の處で、がさくがさくと音が發出し  
た……彼方へ、此方へ、鼠が、ものでも引摺るやうで、床へ響く、  
と其の音が、變に、恚う上に立つてる私の足の裏を擦ると云つた  
形で、むづ痒くつて堪らないので、もさく身體を揺りました。

——本尊は、まだ瞬もしなかつた。——其の内に、右の音が、  
 壁でも攀ぢるか、這上つたらしく思ふと、寢臺の脚の片隅に  
 羽目の破れた處がある。其の透間へ鼯がちよろりと覗くやうに、  
 茶色の偏平い顔を出したと窺はれるのが、もぞり、がさりと  
 少しづゝ入つて、ばさゝと出る、と大きさがて三俵法師、  
 形も似たもの、毛だらけの凝團、足も、顔も有るのぢやない。  
 成程、鼠でも中に潜つて居るのでせう。  
 其奴が、がさゝと寢臺の下へ入つて、床の上をずるゝと引  
 摺つたと見ると、婦が搔卷から二の腕を白く抜いて、私の居る  
 方へぐたりと投げた。寢亂れて乳も見える。其を片手で祕したけ  
 れども、足のあたりを震はすと、あゝ、と云つて其の手も兩

方、空を掴むと裙を上げて、弓形に身を反らして、搔卷を蹴て、轉がるやうに衾を抜けた。……

わたしとびだ  
私は飛出した……

壇を落ちるやうに下りた時、黒い狐格子を背後にして、婦は斜違に其處に立つたが、呀、足許に、早やあの毛むくぢやらの三俵法師だ。

白い踵を揚げました、階段を迂り下りる、と、後から、ころくと轉げて附着く。さあ、それからは、宛然人魂の憑ものがしたやうに、毛が赫と赤く成つて、草の中を彼方へ、此方へ、たゞ、伊達巻で身についたばかりのしどけない媚かしい寢着の婦を追す。婦はあとびつしやりをする、脊筋を振らす。三俵

法師は、裳にまつはる、踵を嘗める、刎上る、身震する。

やがて、沼の縁へ追迫られる、と足の甲へ這上る三俵法

師に、わなく身悶する白い足が、あの、釣竿を持つた三

人の手のやうに、ちらくくと宙に浮いたが、するりと音して、帯

が亘ると、衣ものが脱げて草に落ちた。

「沈んだ船——」と、思はず私が聲を掛けた。隙も無しに、陰氣

な水音が、だぶん、と響いた……

しかし、綺麗に泳いで行く。美しい肉の脊筋を掛けて左右へ開く

水の姿は、軽い羅を捌くやうです。其の膚の白い事、あの合歡

花をばかした色なのは、豫て此の時のために用意されたのかと

思ふほどでした。

動うごきや止とんだ赤あか茶ちやけた三さん俵だら法師ぼふしが、私わたしの目めの前まへに、惰だ力りよくで、

毛け筋すぢを、ざわくとざわつかせて、うツぷうツぷ喘あへいで居ゐる。

見みると驚おどろいた。ものは棕しゆろ櫚ろの毛けを引ひ束ツつかねたに相さう違ゐはありませ

ん。が、人ひとが寄よる途と端たんに、ぱちぱち豆まめを焼やく音おとがして、ばら

と飛と着びついた、棕しゆろ櫚ろの赤あかいのは、幾いく千せん萬まんとも數かずの知しれない蚤のみの集か

團たまであつたのです。

早はや、兩りやう脚あしが、むづく、脊せ筋すぢがびちく、頸えりくび首びへびち

んと來くる、私わたしは七しつ顛てん八はつ倒たうして身からだ體たを振ふつて振ふり飛とばした。

唯と、何なんと、其その棕しゆろ櫚ろの毛けの蚤のみの巢すの處ところに、一ひとり人り、頭づの小ちひさい、

眦めじりほと頬ほの垂たれ下さがつた、青あを膨ぶくれの、土ど袋ぶつで、肥で張つな五ご十じふ恰かつ好かう

の、頤あご鬚ひげを生はやした、漢をが立たつて居ゐるぢやありませんか。何なにもの

とも知れない。

越中禪と云ふ……あいつ一つで、

眞裸

眞裸

で汚い尻です。

婦は沼の洲へ泳ぎ着いて、卯の花の茂にかくれました。

が、其の姿が、水に流れて、柳を翠の姿見にして、ぽつと映

つたやうに、人の影らしいものが、水の向うに、岸の其の柳の根

に薄墨色に立つて居る……或は又……此處の土袋と同一やうな

男が、其處へも出て来て、白身の婦人を見て居るのかも知れま

せん。

私も其の一人でせうね……

(や、待てい。)

青膨れが、痰の擲んだ、ぶやけた聲して、早や行掛つた私

を留めた……

(見て貰えたいものがあるで、最う直ぢやぞ。)と、首をぐたりと遣りながら、横柄に言ふ。……何と、其の兩足から、下腹へ掛けて、棕櫚の毛の蚤が、うよくぞろく……赤蟻の列を造つてる……私は立窘みました。

ひらく、と夕空の雲を泳ぐやうに柳の根から舞上つた、あゝ、其は五位鷺です。中島の上へ舞上つた、と見ると輪を掛けて颯と落した。

(ひい。)と引く婦の聲。鷺は舞上りました。翼の風に、卵の花のさらくと亂るゝのが、婦が手足を畝らして、身を蹴くに宛ながら然である。



いまんが  
 今考へると、それが矢張り、あの先刻の樹だつたかも知れませ  
 ん。おなかをりかせ  
 同じ薫が風のやうに吹亂れた花の中へ、雪の姿が素直に  
 た  
 立つた。が、滑かな胸の衝と張る乳の下に、星の血なるが如き一  
 としづくからくれなゐ  
 雫の鮮紅。糸を亂して、卯の花が眞赤に散る、と其の淡  
 すべに  
 紅の波の中へ、白く眞倒に成つて沼に沈んだ。汀を廣くす  
 るらしい寂かな水の輪が浮いて、血汐の綿がすらくと碧を曳い  
 たゞよなが  
 て漾ひ流れる……

(あれを見、血の形が字ぢやらうが、何と讀むかい。)  
 — 私が息を切つて、頭を掉ると、

わか  
 (分らんかい、白痴めが。)と、ドンと胸を突いて、突倒す。  
 おもちから  
 重い力は、磐石であつた。

(又……遣直しぢや。)と眩きながら、其の蚤の巢をぶら下げると、私が茫然とした間に、のそのそ、と越中禪の灸のあとの有る尻を見せて、そして、やがて、及腰の祠の狐格子を覗くのが見えた。

(奥さんや、奥さんや——蚤が、蚤が——)

と腹をだぶく、身悶えをしつゝ、後退りに成つた。唯、どしんと尻餅をついた。が、其の頭へ、棕櫚の毛をずぼりと被る、と梟が化したやうな形に成つて、其のまゝ、べたくくと草を這つて、縁の下へ這込んだ。——

蝙蝠傘を杖にして、私がひよろ／＼として立去る時、沼は暗うございました。そして生ぬるい雨が降出した……

(奥さんや、奥さんや。)

と云つたが、其の土袋の細君ださうです。土地の豪農何

某が、内證の逼迫した華族の令嬢を金子にかへて

娶つたと言ひます。御殿づくりでかしづいた、が、其の姫君は

可恐い蚤嫌ひで、唯一匹にも、夜も晝も悲鳴を上げる。其の悲

しさに、別室の閨を造つて防いだけれども、防ぎ切れない。で、

果は亭主が、蚤を除けるための蚤の巣に成つて、棕櫚の毛を全

身に纏つて、素裸で、寢室の縁の下へ潜り潜り、一夏

のうちに狂死をした。――

(まだ、迷つて居さつしやるかなう、二人とも――旅の人がの、

あの忘れ沼では、同じ事を度々見ます。)

旅籠屋はたごやでの談話はなしであつた。」

工學士こうがくしは附つけたして、

「……祠ほこらの其その縁えんの下したを見みましたがね、……御存ごぞんじですか……異

類るゐいぎやう異い形いしな石いしがね。」

日ひを經へて工學士こうがくしから音信おとづれして、あれは、乳香にうかうの樹きであら

うと言いふ。

# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷十六」岩波書店

1942（昭和17）年4月20日第1刷発行

1987（昭和62）年12月3日第3刷発行

入力：馬野哲一

校正：鈴木厚司

2000年12月13日公開

2005年11月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 人魚の祠

泉鏡太郎

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>